

NEWS LETTER

甲南大学 ビジネス・イノベーション研究所

ヴェブレンとコーポレートガバナンス論

経営学部 馬場 大治

定年まで残り数年を数えるだけとなり、残された時間をどのような勉強に費やそうかと考えた結果、かつて勉強しようと思いついてもする時間がなかった、もしくは、簡単には歯が立たなくて打ちちゃっていた、時代を超えて残された古典的な議論の再勉強を始めることにした。当然これらの議論は時代背景も古く、古色蒼然となっているものも多いが、思いがけない現代的な意義もあり、「目から鱗」のような気分になることがある。ここではそのような勉強の成果として、19世紀末に注目され、制度学派の祖とされるヴェブレンの議論を紹介し、現代において論争となっているコーポレートガバナンス論に対するその意義を考えたい。ただし、ヴェブレンの議論は、立論の仕方や用語法も非常に特殊で独特であるため、ここでは筆者の理解のもとにそれを現代風に「翻案」して論じている。

主流派経済学のように物質的な満足を通じて自己の効用を極大化すると人間をシンプルにとらえるのではなく、人間は複数の欲求を本来的に有しており、状況によってそれが様々な形で人間の行動に反映することを、ヴェブレンはその議論の出発点としている。ここでの議論との関連で重要な欲求として、収取本能と呼ばれるものがある。これは他人の利益や集団の利益よりも自己の利益を追求しようとする本能であり、主流派経済学で想定されている人間の欲求に近いものである。これに対して、職人がうまく物を作りたいと願うように、より有用な生産物をより能率的な形で生産したいと願い、それを通じて自己の属する集団の利益を考え、共通利益のために尽くしたいという、収得欲求と相反する工匠・親和欲求も人間は有していると考えられる。

2つの矛盾する欲求を人間は有していることに呼応する形で、企業においても次の2つの矛盾する側面があることが指摘される。その第1は、企業においては販売されることを目的に生産が行われており、その運営のエンジンとなるのは利潤獲得である。このような側面を、ヴェブレンは「ビジネス」と呼び、これは人間の収取本能を具現化したものであるとする。一方、機械的生産方法が発達した近代企業においてその過程に従事する人々は、それをうまく運営するべく技術を深め、より能率的に良い製品を生みたいとの思考習慣を持つようになる。このような思考習慣は、高度な産業能率にとって不可欠のものであるが、これは工匠・親和欲求が具現化したものであると考えられる。ヴェブレンは企業のこのような側面を「産業」と呼んでいる。

2024
vol. 52

つまり、企業は、収取欲求にもとづく「ビジネス」と、工匠・親和欲求にもとづく「産業」の相矛盾する2つの側面によって立つと考えられ、このような状況をヴェブレンは企業の二重構造の矛盾と呼んでいる。

個人が出資して、実際の生産の指揮管理を行う個人企業の段階では、この2つの側面は同一の人間によって執り行われ、両者の間にはある種の折り合いがつけられていた。ところが、生産技術がより高度に発展した近代企業において、出資を行うものと生産過程の運営行うものが分離する「資本と経営の分離」が生じ、上記の矛盾が先鋭化した。つまり、出資者である企業家は生産過程に直接関わらず、ビジネスの側面のみに従事する。一方、実際の生産活動、すなわち、産業の側面は管理者や技術者等の生産的職業に従事する人々が、もっぱらこれを執り行う。企業は法的にはその出資者を所有者であるとしており、その支配権を認めている。つまり、企業において、もっぱら収取本能によって動かされる資本によって、本来、工匠・親和本能が必要とされる生産過程が支配されこととなる。ヴェブレンは彼がそれを論じた19世紀末のアメリカ企業の状況がそのような状況であると考え、非常に不健全な状況であると悲観的にとらえている。

さて、コーポレートガバナンスに関する議論は、出資者である株主の意向が企業経営に反映されにくい所有と支配が分離した状況を前提に、株主による経営者に対するコントロールの程度をいかにすべきかという観点での議論がその中心であり、1990年代以降、長年にわたって論争となってきたテーマである。一般に、コントロールをより強めるべきであるとする議論が優勢であり、実際の法制度等もその方向に進んでいるように思われる。

上述のヴェブレンの議論は、所有と支配の分離以前の状況を前提に論じられたものであるが、現在のコーポレートガバナンス論議に、従来なかった新しい視点をもたらす可能性を秘めている。上述のように、ヴェブレンは、資本（すなわち、収得本能）による産業（すなわち、工匠・親和本能）の完全支配を問題視しているが、所有と支配が分離し、株主による経営者に対する支配が不完全であることは、資本による産業の支配が不完全であることに他ならない。つまり、所有と支配の分離の傾向があることは、ヴェブレンの云うところの企業の二重構造の矛盾がより緩和された状況であることを含意する。反対に、経営者へのコントロールを強め、株主による支配がより強化される状況は、その矛盾を再燃させ、悪化させる可能性を秘めていると警鐘を鳴らしていることになる。

このように、1世紀以上前のヴェブレンの議論に触れることで、企業で行われていることを人間の本性に照らして考察し、それに基づいて、現代的な問題に対する新しい示唆を得ることができる。古典、恐るべし！！である。

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所第39回研究会

テーマ：「グローバルビジネスの拡大と サプライチェーンの強靱化」

日 時：2023年12月7日（木）13:30～16:00

場 所：甲南大学ネットワークキャンパス東京（対面&Zoom オンライン配信）

司会・コーディネーター：

ビジネス・イノベーション研究所兼任研究員（経営学部教授）杉田 俊明氏

第一部：東レ繊維事業の成長戦略

担当講師：石井 一氏 東レ株式会社常務執行役員

（繊維事業本部副本部長、グローバルSCM部門長。タイやマレーシア現地法人の営業部長、取締役、本社の会長秘書などを歴任）

世界情勢や市場、消費者要望の変化などに迅速敏感に反応し、従来型の製造業から「情報製造業への変革によるグローバルサプライチェーンマネジメントの深化」を図り、グローバルビジネスにおいて快進撃を続ける知名SPA企業を支え、ビジネスの拡大を図る東レ繊維事業の成長戦略についてお話しいただきました。

第二部：戦略としてのデリスキングとレジリエンス・ポートフォリオ

担当講師：杉田 俊明氏 甲南大学経営学部教授

（商社、コンサルティング会社勤務を経て現職。『中国ビジネスのリスク・マネジメント』（単著、ダイヤモンド社、1996年）などグローバル経営関連論著多数。）

アジア・中国をもとにグローバルビジネスの現場での調査研究担当歴は40年を超え、日本企業をはじめ、グローバルにおいても多大な影響力をもつ華人系財閥企業などに対する数々のケース研究から転換期における企業のグローバル経営戦略の最新動向についてお話しいただきました。

●参加された方々からは

- ・東レなどの大企業での実践的なお話と、理論的な研究の両面からお話を伺う事ができ、非常に勉強になりました。
- ・理論的な部分に加えて実際の企業の方から企業の実態をお聞きしたことが大変貴重な機会であったと感じました。
- ・サプライチェーンについてより実践的な説明をしていただき、地産地消によるサプライチェーンの構築やパートナーシップに合わせた構築を行っていることを知ることができ、よかったです。

などのお声を多数いただきました。

甲南大学公開講座
甲南大学ビジネス・イノベーション研究所 第39回研究会

「グローバルビジネスの拡大と サプライチェーンの強靱化」

日 時 2023年12月7日（木） 13:30～16:00
司会・コーディネーター 杉田俊明氏 甲南大学経営学部教授
ビジネス・イノベーション研究所兼任研究員

第一部：東レ繊維事業の成長戦略



担当講師：石井一氏 東レ株式会社 常務執行役員
繊維事業本部副本部長、グローバルSCM部門長。
タイやマレーシア現地法人の営業部長、取締役、本社の会長秘書などを歴任。
世界情勢や市場、消費者要望の変化などに迅速敏感に反応し、従来型の製造業から「情報製造業への変革によるグローバルサプライチェーンマネジメントの深化」を図り、グローバルビジネスにおいて快進撃を続ける知名SPA企業を支え、ビジネスの拡大を図る東レ繊維事業の成長戦略についてお話しします。

<担当講師 石井一氏の講演部分に関する録音・録画は固くお断りします。>

第二部：戦略としてのデリスキングとレジリエンス・ポートフォリオ



担当講師：杉田俊明氏 甲南大学経営学部 教授
商社、コンサルティング会社勤務を経て現職。
『中国ビジネスのリスク・マネジメント』（単著、ダイヤモンド社、1996年）などグローバル経営関連論著多数。
アジア・中国をもとにグローバルビジネスの現場での調査研究担当歴は40年を超え、日本企業をはじめ、グローバルにおいても多大な影響力をもつ華人系財閥企業など、数々のケース研究から転換期における企業のグローバル経営戦略の最新動向についてご紹介いたします。

受講方法 ハイブリッド（会場参加またはオンライン）
会 場 甲南大学ネットワークキャンパス東京（東京駅日本橋口隣接）
受 講 料 無 料
お申込み 下記のURLまたは右のQRコードからお申込みください
<https://www.konan-u.ac.jp/hp/redirect/nctokyo-2023-03.html>
申込受付期間：2023年11月11日（土）～ 11月30日（木）

甲南大学 国際都市・神戸にあるミディアムサイズの総合大学
1919年に創立された甲南学園を母体とする甲南大学。学園創立者・平生航三郎が掲げた教育理念「各人の天賦の特性を伸ばさせる人物教育」は今日まで継承され、経済界をはじめ各界で活躍する卒業生を輩出してきました。人文・自然・社会科学の学問分野の広がりミディアムサイズの総合大学の特質を生かした教育で、個性を尊重した人物教育を展開していきます。

お問い合わせ先：甲南大学ネットワークキャンパス東京事務局
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1丁目7番12号サピオタワー10階
Email: nctokyo@adm.konan-u.ac.jp / TEL: 03-6266-9520



神戸ひがしなだスイーツめぐり 甲南大学ビジネス・イノベーション研究所講演会

テーマ：神戸マイスター高杉シェフが語る最近のスイーツ事情 ー西村教授との対談ー

インтロデューサー：BI 研究所長 兼任研究員（経営学部教授）西村 順二

日 時：2023 年 10 月 28 日（土）13:30～15:30

場 所：甲南大学岡本キャンパス iCommons 4 階 ブックカフェ

講 師：高杉 良和氏（神戸マイスター）

神戸マイスター高杉シェフ氏をお招きし、最近のスイーツ事情をお聞きました。阪神・淡路大震災の後、「神戸の地域の皆さんに普通に美味しいスイーツが食べられる、そんな生活に早く戻ってほしいな」という思いを込めて御影に出店をされたお話、日本全国一位になったショートケーキへの考えや思い、今の若い人の「映える」ということへのご自身の感想、お菓子って科学だと思うこと等々、様々なお話や業界の裏話をお伺いしました。

参加された方々からは、以下のような感想をいただきました。

- ・シェフ自身のお話から最近の文化に至るまで全て楽しかったです。おいしいお菓子もご馳走様でした。
- ・素敵な会場でした。チョコレート、モンドセレクション、マドレーヌの話がとても興味深かったです。また聞きたいです。
- ・高杉シェフのお菓子の教室、いつか子ども達にも体験させたいです。

その他にも、またこういう機会を作って欲しいというお声も頂きました。神戸マイスターの高杉シェフは、まだまだスイーツへの思いは深く、様々な試みを行っておられます。また、スイーツへの熱い思いをお聞き出来る機会を設けたいと思います。
(文責 西村 順二)

甲南大学ビジネス・イノベーション研究所講演会

テーマ：「日々の生活必需品・生鮮食品を扱う重要な卸売業態： 卸売市場の役割と今後を考える」

コーディネータ：BI 研究所長 兼任研究員（経営学部教授）西村 順二

日 時：2023 年 11 月 22 日（水）13:00～14:30

場 所：甲南大学岡本キャンパス 1 号館 3 階 131 教室

講 師：高橋 真哉 氏（神戸中央青果株式会社 上席執行役員管理部長）

「業界研究 青果卸売市場について～神戸中央青果㈱の取り組み～」

卸売市場は、日本全国から集められた青果物、水産物、肉、花を取引し、小売店（スーパーマーケット等）、外食事業者（レストラン等）、そして加工業者へ販売する拠点となる卸売業者の集積です。その場で、セリ・入札により商品の値段が決まります。普段は、最終消費者である私達にはなかなか目につきません。ほとんどが早朝にその業務は行われていますし、産地から生鮮産品を受け取りますので交通の結節点等に立地することが多いからです。

この卸売市場は「市民の台所」と呼ばれ、我々の日常生活における生鮮品においては必要不可欠な存在とされてきましたが、近年この卸売市場を経由する産品が減少してきています。しかしながら、卸売市場が果たす機能：集荷・分荷、価格形成、代金決済、そして情報受発信はまだ必要であり、全国40都市（64カ所）に広域流通を担う中央卸売市場が設置され、神戸市にも中央卸売市場本場と中央卸売市場東部市場の2拠点があります。例えば神戸東部市場では、金沢や能登のスイカのカット作業と配荷、加賀梨の冷蔵保存による需給調整、さぬき姫・空浮イチゴ（香川県のイチゴ）の業務用出荷、福岡ぶどうのシャインマスカットの集荷販売等が積極的に行われ、地域流通に寄与しているのが卸売市場なのです。

(講演概要 文責 西村 順二)

 甲南大学

ビジネス・イノベーション研究所

〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1
TEL.078-435-2754 FAX.078-435-2324
E-mail:bi@adm.konan-u.ac.jp
<https://www.konan-u.ac.jp/bi>

発行日／2024年（R.6）3月発行